

後藤竜二、あるいは、現代児童文学のうしろ姿

——歴史物語という場所——

宮川 健郎

後藤竜二の歴史物語については何も書いたことがないと思っていたけれど、ひとことだけ書いたことがあった。本誌一九七九年二月号の特集「斎藤隆介の世界」に投稿して掲載された「叙事」の方へ——斎藤隆介に関する18章」のなかでだ。

斎藤隆介に、「立ってみなさい」という短篇がある（『立ってみなさい』新日本出版社、一九六九年所収。二〇歳のオキは、〈足なえ〉で、いままで一度も自分の足で立ったことがない。炬炬たに足を投げ出して、彫刻をしているだけだ。オキは、酒が好きで、酒を飲みながら仕事をしていたが、ある日、ぶつつり酒がなくなってしまう。いま、村は飢饉なのだ。オキの姉は、〈キキン魔を退治しておいで〉という。オキは、〈おれは、たたかう、なんてことは出来やしない。おれに出来るのは彫ることだけだ。おれはそれで良いんだ〉とこぼむ。姉は、〈オキ。立ってみなさい〉という。——〈オキは立った。オキは立てた。（中略）立ってみると、世界も高くなった。元気が体にあふれた。オキは

ポロポロと涙をこぼした。〉

オキと姉のやりとりについて、古田足日は、〈この問答が身にこたえるのだ。〉としながら、しかし、〈どのようにしたら立てるのか〉と述べた。——〈どのようにしたら立てるのか、といえば、斎藤隆介は激怒するだろう。「本気で立とうとしたことがないからだ」というにちがいない。／しかし、それでもなお、ぼくには「立ち方」が問題なのだ。立ち方は、いいかえれば、どのようにして変革が可能になるか、というプロセスなのだ。〉（古田『児童文学の旗』理論社、一九七〇年）

私は、古田のいう「立ち方」を示した作品として、まず、古田自身の『ぼくらは機関車太陽号』（新日本出版社、一九七二年）をあげ、後藤竜二の『白赤だすき小〇の旗風』（講談社、一九七六年）をあげた。『ぼくらは機関車太陽号』は、話し合いや行動を積み上げながら、「歩き遠足」をなすとげる子どもたちを描いた。後藤竜二の作品については、短くこう記している。